3章

【問題】（演習）

出典…目崎徳衛『日本詩人選6　在原業平・小野小町』／　早稲田大学　商学部　99年

文章略解

在原業平の母と業平との贈答歌には、老い先短い母が息子に会いたいと切望するさまと、それに対して一般論で逸らしつつも切実な思いを訴える息子の思いとが素直に表れている。しかしながら古今集の撰者たちはこの贈答歌を母子相愛の歌とは解さなかったようで、「老い」を嘆く主題の歌の中に収めている。業平の返歌の下の句「千代もとなげく人の子」が、撰者たちの解釈を乗り越えて母子相愛の情を際立たせてしまったのであろう。

現代語訳

（在原）業平の朝臣のお母上で内親王（でもある人）が、（京の）長岡に住んでいましたときに、業平は宮仕えをしているからということで、時々（宮中から退出して母親のもとへ）うかがうこともできないでおりましたところ、師走頃になって、母である内親王のところから、急なことであるといって（業平のもとに使者が）手紙を持って参上してきた。（その手紙を業平が）開いてみたところ、文章は書かれておらず、（ただ一首だけ）あった歌は（以下のようなものであった）。

1　老いぬれば……齢を取ってくると避けられない別れ〔＝死別〕もあるというから、ますます会いたくなってくるあなたですよ

業平朝臣の返歌は（以下のようなものであった）。

2　世の中に……この世に避けられない別れがなくなってほしいなあ。（親の命が）千年も（続いてほしい）と嘆く人の子のためには

3　人の親の……（一般の）人の親の気持ちというのは闇（のように見境がないもの）ではないけれども、（自分の）子どものことを思うと（暗闇の）道に迷ってしまう（ように見境がつかなくなる）ものなのだなあ

4　鏡山いざ……鏡山だ。さあ立ち寄って（自分の姿を映して）見ていこう。年を取った我が身は老いてしまったかどうかを

5　しらゆきの……白雪が幾重にも降りつもるかえる山（のように、私も）かえすがえす老いたものだなあ（と痛感する）

解答

問1　ニ　　問2　A＝イ　　B＝イ

問3　ハ　　問4　イ　　問5　ロ

問6　ハ　　問7　5

問8　Ⅰ＝とみの事〔2行目〕　　Ⅲ＝老い〔27行目ほか〕

問9　いよいよ〔4行目〕

【問題】（演習）

出典…唐順之『任光禄竹渓記』／上智大学　10年

書き下し文

余嘗て京師の侯家富人の園に游び、其の蓄する所を見る。絶徼海外の奇花石より致さざる所無く、致す能はざる所の者は惟だ竹なり。吾が江南の人竹を斬りて之を薪にす。其の園を為るや亦た必ず海外の奇花石を購求し、或は千銭にて一石を買ひ、百銭にて一花を買ひ、自ら惜しまず。然れども竹其の間に拠ること有らば、或は芟りて焉を去りて、曰く「是を以て我の花石地を占むる毋かれ」と。京師の人苟しくも一竹を致す可くんば、輒ち数千銭を惜しまず。然れども纔かに霜雪に遇はば又槁れて以て死す。其の致し難く又多く槁死するを以て、則ち人益々之を貴ぶ。江南の人甚だ或は之を笑ひて曰く、「京師の人乃ち吾の薪とする所を宝とす」と。嗚呼奇花石は誠に京師と江南の人との貴ぶ所と為る。然れども其の生ずる所の地を窮むれば、則ち絶徼海外の人之を視ること、吾意ふに其れ亦た以て甚しくは竹の江以南に在るに異なる無し。絶徼海外或は素より竹を産せざるの地にして、然れども其の人をして一旦竹を見せしむれば、吾意ふに其れ必ず又た京師の人の之を宝とする者より甚しき有らん。是れ将た笑ふに勝へず。語に云ふ「人郷を去れば則ち益々賤しまれ、物郷を去れば則ち益々貴ばる」と。此を以て之を言へば世の好醜も、亦何の常か之有らん。

現代語訳

私は以前、都〔＝北京〕に住む裕福な貴族の家の庭を見学し、彼らが集めているものを見たことがある。遠く離れた海外の珍しい花や石から（はじまり）、全てのものが集まっているが、（唯一）集められなかったものは竹だけであった。私たち江南人〔＝長江南部の地域の人〕は、竹を斬って薪にしている。彼ら〔＝江南人〕もまた、きっと海外の変わった花や石を買い、ある者は千銭（もの大金）で宝石を買い、ある者は百銭（もの大金）で花を買い、自分から〔＝決して〕（金を出すことを）惜しまない。ところが、（もし）その間〔＝花と石の間〕に竹があったら、ある者はそれ〔＝竹〕を刈り取って、こう言うだろう。「これ〔＝竹〕で、私の花と石の場所を占有しないでくれ〔＝置かないでくれ〕」と。しかし、都の人がもし竹を手に入れることができたなら、いつでも何千銭（もの大金）を惜しまないだろう。ところが、少しでも霜や雪の被害に合ってしまうと、枯れてしまう。その手に入れにくく、ほとんどが枯れてし

まうことから、人はさらにこれ〔＝竹〕を珍重するのである。しかし、江南人は大層これ〔＝都の人〕を嘲り笑いながらこのように言う。「都の人間は、私たちが薪にするものを宝物にしている」と。ああ、珍しい花や石は、確かに都の人や江南人によって珍重されている。ところが、それら〔＝珍しい花や石〕の産地までさかのぼって考えてみると、遠く離れた地の人がこれ〔＝珍しい花や石〕を見るのは、竹が江南の地にあることとそれほど変わりはしない。そして遠く離れた場所、あるいは竹が取れない場所であっても、その土地の人に一度竹を見せたとすれば、都の人がこれを宝にする以上のものがあるだろうと私は思う〔＝都の人よりそれらの土地の人のほうが、竹を珍しがるだろう〕。これはさらに、おかしなことだ。こんなことわざがある。「人が故郷を離れればいっそう賤しまれ、物が産地を離れればいっそう貴ばれる」と。ここでこれを言うと〔＝こうしてみると〕、世の中にある物の良し悪し（の基準）は、どうして変わらないだろうか、いや変わるはずだ。

解答

問1　d　　問2　Ⅰ＝b　Ⅱ＝d

問3　a　　問4　b

問5　4＝c　5＝a　　問6　a

問7　c

【問題】（自習）

出典…西郷信綱『古代人と夢』〈第一章　夢を信じた人々〉／法政大学　経済学部　97年

文章略解

『今昔物語集』には、里人の夢告のおかげで、湯治に来ただけの無関係な男が観音様として祭り上げられ、当人もそれを信じて出家してしまったという話がある。昔の譚を現代の観点から、あり得ない虚構であると批判するのはたやすいが、それでは歴史的想像力を欠くことになる。夢は夢それ自体として現実であり、部分的な覚醒ではない。この譚には、夢を信ずべきものとした昔の文化の一つの型が示されていると言えるだろう。

現代語訳

今となっては昔のことだが、信濃の国の□□郡に□□の湯というところがある。いろいろな人が、薬湯だということで（湯治のために）やってきて湯浴みするという温泉である。

そうしているうちに、その村〔＝□□郡の湯のあるところ〕にいる人が夢に見ることには、「だれかがやってきて告げて言うには『明日の正午ごろに観音さまがいらっしゃってここの湯をお浴びになる予定になっている。（あなたは、その時に）必ず（観音さまと）仏縁をお結び申し上げ（功徳を得）なさい』と。この（夢を）見る人が尋ねて言うには、『（観音さまは）どのような姿でいらっしゃるのだろうか』と。告げる人が答えていうには、『年が四十歳ほどの男でヒゲの濃い人で、綾藺笠をかぶって、節が黒い大きな胡録（＝矢を入れる道具）を背負って、革を巻いてある弓を持ち、紺色の水旱（＝狩衣の一種）を着て、夏毛の行騰〔＝脚部をおおうもの〕（をつけ）、白足袋を履いて、（鞘を）黒く塗った大刀を帯びて、葦毛の馬に乗ってくる人がいれば、その人を必ず観音さまだとお見受け申し上げなさい』と告げるのを聞いた」と思っているうちに、夢が覚めた。驚き怪しんで、夜が明けてから（その夢を見た人は）広くその村の人々にこのことを告げまわり、語り聞かせた。

すると、これを聞きついで、（人々が）この湯に集まること（といったら）限りない。すぐに湯を入れ換え、周囲の庭を掃除し、しめ縄を引き、香や花を準備して、たくさんの人が（その場に）びっしりと座り込んで（観音さまのお出ましを）お待ち申し上げると、

太陽（でわかる刻限）がだんだんと正午から傾いて未の刻〔＝午後一～三時〕になるころに、あの夢に見たような男がやってきた。顔からはじめ、夢に言っていた様子と少しも違う所がない。（そのやってきた男が）傍らの人にむかって「これは何事なのか」と尋ねるのだが、（人々は）ただ礼拝するばかりで、この（観音さまがやって来るという夢告げの）ことを聞かせる人がいない。（その場に）一人の僧がいて手をすりあわせて額に当てて座り込んで拝んでいるところに近寄って、（この）男が、「これはどういうことで、私を見てみなさんが拝みなさるの（です）か」と、訛のひどい話し方で尋ねると、僧が答えて言うには、「昨夜、ある人が夢にこれこれこういうことを見たことによってです」と。

男がこれを聞いて言うには、「私はこの一、二日前に、狩りをして馬から落ちて、左のほうの腕を突いて折ってしまったので、それを湯治するために来たのだが、このように（私のことをみんなが）一斉に拝みなさるのは何とも変な感じだなあ」などと言って、あちらこちら（逃げて）行くのを、（集まった）人々はみな（その人の）後を追って拝んで騒ぎ立てる。男は困ってしまって、「この私は、それならば観音さまであるようだ。同じことなら、私は法師になってしまおう」と言って、その庭に弓矢を捨てて、武器を放り出して、直ちに髻を切って（剃髪して）法師になった。このようにして（その男が）出家するのを見て、（集まった）人々は限りなく尊び、深く感動した。

そうこうするうちに、たまたまこの男の知り合いの人が出てきて（この男を）見て言うには、「あの人は上野の国〔＝群馬県〕にいる王藤殿であるようだ」と言ったので、みんなはそれを聞いて、（その男の）名を王藤観音とつけた。（この男は）出家した後、比叡山の横川に登って、覚朝僧都という人の弟子になっていた（ということだ）が、五年ほど横川にいて、その後は土佐の国に行ってしまった。その後は、その（人の）様子を伝え聞いた人はいない。

解答

問1　①＝エ　②＝ア　③＝ウ　④＝ア

問2　A＝8　B＝6　C＝10　D＝10　E＝6　F＝2　G＝6　H＝6　I＝9　J＝9　K＝4
L＝7　M＝5　N＝3　O＝1

問3　1＝(d)　2＝(c)　3＝(b)　4＝(e)　5＝(a)　6＝(a)

問4　a＝6　b＝6　c＝4

問5　カ―エ―イ―ケ―オ―ク―ア―キ―ウ

解説

問1　このような、選択肢形式の部分解釈問題の場合、その部分についての語学的知識・理解があやふやな部分が多少あっても、選択肢が手助けをしてくれる場合が多い。あきらめずに最大限の得点力を発揮させよう。

①については、前半の「結縁」が「（仏と）縁を結ぶ」「仏道に入るきっかけをつかむ」ぐらいの意味だと分かれば（これぐらいのことは、後の「忽ニ髻ヲ切リテ法師ト成リヌ」（22行目）という記述などから容易に把握できるはず）、その段階でまずウはカットできる（ここでは「結」に「結婚」の意味はない）。あとは「奉ル」が本動詞である（実際に何か物を納める＝ア）か、補助動詞である（直前の「結縁シ」に謙譲の意を添える＝エ）かの判断であろう。この本動詞・補助動詞の見きわめに関しては傍線部分の直前で「観音様がいらっしゃって湯浴みをされる。そうすればきっと……」と述べられているところから考えれば、「観音様とあなたが縁を結ぶための行動をする」という話の流れだと推測できるだろう。実際に何か物を観音様に奉納している文脈だとは考えにくい。というわけで解答はエ。イ・オの両者はこの敬語の訳出を欠いている点で不適切。また、イの「修行の結果を報告する」やオの「悩みを解消してもらう」という表現に相当する部分も問題文中に求めにくい。

②については、「トカク」が「とまれかうまれ（↑ともあれかくもあれ）」などと対で使われる副詞、つまりは「あれやこれやといろいろ」という意味であることからすぐに判断できるだろう。ア以外はこの意味合いを反映していない。

③は古今異義語。「ののしる」は現代語では「非難する」「悪口を言う」の意味だが、古語では単に「大声で話す」「うるさく騒ぐ」ということ。これは選択肢群ではウに相当する。エの「怒鳴る」も意味的には近いが、これだと直前の「礼ミ」（＝拝むこと）という動作にそぐわない。

④は、「男侘ビテ」というふうに自動詞（主語＋その動詞だけの文）で用いられていることに注意。「わびる」というと現代語では一般的にはオの意味に取られがちだが、これは他動詞であるので「謝る」相手が必要になる。（「謝る」の意味ならば漢字表記はふつうは「詫ぶ」になる。）ここでは「思い侘びる」の意味に解釈すべきだろう。本来「わぶ」は「心中のつらさがつい口を突い

て出てしまいそうな心情を感じること」を指す。オ以外の選択肢はいずれも精神的なニュアンスに取っているが、ここに至る経緯（狩りで負傷して湯治にやってきただけで、崇められることに心当たりがない＝19〜20行目）に照らせばアがベスト。

問2　面倒な作業を伴う問題だが、ひとつひとつ照らし合わせていくしかない。重複が許されているので、解答を導いていく際に順番は関係ない（解く側からすれば、どこからやっても同じことだ）。以下、便宜的に問題文の順番に説明していく。

Aに関しては、直前の「この」という指示語が、「この男」を「みんなして観音と信じこんでひたすら礼拝する」（30行目）の部分を指していることから推せば、「非常に強い」力＝「圧倒的」ということがわかるだろう。

B・Eはいずれも南方熊楠の評言の中の言葉で、なおかつサ変動詞の語幹になっている。この批判が、先に検討した「我ガ身ハ然レバ観音ニコソ有ルナレ」と男が思い始める部分を指していることから推せばいずれも6の「確信」が入るべきだろう（そもそも選択肢の中でサ変動詞の語幹になりうるのはこれしかない）。そうすると「Cと呼ばれて……自分をDと有頂天に成て」としているところも、「他人から褒められる」の意味であることが分かる。選択肢の中で褒め言葉になりそうなものは10の「色男」ぐらいか。これならば「鏡」（34行目）にも相当する。Fについては、2の「滔々」は本来は水流の勢いのある様子を形容する語で、拡大されると「世の中の時流の強い勢い」ぐらいの意味があることがわかればこれを入れられよう。GもB・Eと同様にサ変動詞の語幹であることから推して6の「確信」しか入り得ない。ここまで考えてくるとHも推測できる。ここは「観音と言れて自分を観音と確信する人」と「色男と呼ばれて……自分を色男と有頂天に成て確信する者」とが基本的に「確信」という点で同じだ……と言っているのである。したがって、ここも6の「確信」が入る。

Iについては、この「現在も昔も同じだ」という南方の主張に照らして、「現代の世相人情を標準として、昔の譚を批判する」（36〜37行目）ということがIを欠く、という話の流れから9の「思いやり」を入れていく。JもこのIを指しているわけであるから同様に9。こうすれば、「想像力という言葉におき変えることもできる」（39〜40行目）という内容にもうまくつながる。しかもその「想像力」は「昔の譚」についてのものであるから、Kには4の「歴史的」を入れるべきだろう。

L・M・Nについては、直前（40行目以下）で「過去と現代」の関係が「夢と覚醒」の関係と類比されている文脈を読みとるべきだろう。それぞれが因果関係でつながっているのではなく、独自の現実的存在なのだ……という筋である。したがってLは7の「因果的」、Mは5の「現実」、Nは「部分的」覚醒、というふうにつながっていく。Oは直前の「仏法のありがた味を説くための」

というところから、そのための「方便」（＝1）であると考えられる。

問3　いずれの空欄も文末になっていることから考えて、活用語の活用語尾を含むものか、終助詞であると推測できる。まずはそれぞれの選択肢について確認し、前後を見比べてそれぞれあてはめていこう。

(a)の「ケル」は《詠嘆》《伝承過去》の助動詞「けり」の連体形で連用形接続。これが入るには、直後に体言（もしくは準体言）が続くか、あるいは係助詞の「ぞ」に導かれている必要がある。空欄のうちでは**5**・**6**だけが係助詞「ぞ」に導かれており、意味上もこれで問題ない。

同様に係助詞に注目していくと、**1**・**2**・**4**はいずれも「コソ」に導かれている。したがって、これらに入りうる選択肢は已然形活用語尾になっている(c)・(d)・(e)の三つ。このうちで**1**に(d)を入れるのは簡単だろう。これは空欄の直前が「思」と語幹のみしかないので、その語尾になりうるもの……と考えていけばいい。(c)と(e)の識別に関しては、(c)が《伝聞推定》「なり」・(e)が《眼前推定》「めり」を原形としていることから考えたい。**2**については直前の「然レバ」の部分が、人々が自分（その男）のことを「観音様」だとして崇めていることを踏まえているということに照らせば、「他人の発言」を基にする(c)だとわかる。**4**については、この空欄を含む科白が「見テ云ハク」（24行目）に導かれていることから推せば《眼前推定》であることは明らか。

(b)の「ナム」は前述のとおり係助詞ではなく（係助詞ならば、会話文で結びの省略のある場合を除いては、文末には来ない）、終助詞の「なむ」《他への願望》か、助動詞「ぬ」《確述》《完了》の未然形「な」＋助動詞「む」（《意志》・《推量》ほか）の終止形または連体形のどちらかと考えられる。いずれにしても、空欄のうちで終止形以外を結びに要求する係助詞を含んでいないものは**3**だけで、直前が連用形になっていることからも妥当である。ここでは「法師になってしまおう」という意志のニュアンスに解釈できることになる。

問4　基本的な文法問題。以下に品詞分解したもの（活用語は活用形も）を記しておく。

a　来（カ変動詞・連用形）・給ハ（四段動詞・未然形）・ム（助動詞・終止形）・ト（助詞）・スル（サ変動詞・連体形）・ゾ（助詞）

b　夢（名詞）・ニ（助詞）・云ヒ（四段動詞・連用形）・ツル（助動詞・連体形）・様（名詞）・ニ（助詞）

c　貴ビ（四段動詞・連用形）・悲シム（四段動詞・連体形）・事（名詞）・限ナシ（形容詞・終止形）

問5　やっかいな問題だが、**問2**のL～Nあたりで検討した内容をもとに考えていけばいい。

述語になりうるのはウ・クのふたつ。一方、主語になりうるものはア・カのふたつ。この両者を合わせてみると、「夢は……現前であり続ける」（ア―ウ）とつなぐのが自然であることはすぐにわかる。ウの「一つの現前」とはキの「一つの独自な『うつつ』」に相当しているので、ア―キ―ウという一つのセンテンスができる。対して、カ―クの二つは、そのままで主語―述語とするには不自然である。カの性質を説明したものとしてエを置いて、それからイ―クとつないでいけばいいだろう。このカ―エ―イ―クの基本ラインに、クの目的語としてのケを直前に入れていけばいい。オの挿入に関しては迷うところだが、クの「霊夢」とケの「霊夢」とが「同じこと」であるというふうに入れれば最も自然か。こうすれば原文が復帰できる。

【問題】（自習）

出典…『新唐書』巻一六五、『旧唐書』巻一七三　／　早稲田大学　文学部　08年

書き下し文

鄭朗、字は有融。開成中に起居郎に擢ばる。文宗宰相と政を議す。適々朗筆を螭頭の下に執るを見る。謂ひて曰はく、「向に論ずる所の事、亦た之を記すか。朕将に之を観んとす」と。朗曰はく、「臣筆を執りて書く所の者は、史なり。伏して故事に準らば、天子は取りて史を観るべからず。昔太宗之を観んと欲す。朱子奢曰はく、『史は善を隠さず、悪を諱まず。中主より以下、或は非を飾り失を護ふ。之を見さば、則ち史官以て自ら免るること無し。且つ敢て直筆せず』と。褚遂良亦た称ふ、『史は天子の言動を記す。非法と雖も必ず書し、自ら戒めんことを庶幾ふ』」と。帝悦び宰相に謂ひて曰はく、「朗故事を援きて、朕の起居注を見るを欲せず、善く職を守る者と謂ふべし。然れば人君の為は、善悪必ず記す。朕平日之を言ふは治体に叶はず、将来の羞と為るを恐る。庶はくは一見して、以て自ら改むるを得ん」と。朗遂に之を上る。

現代語訳

鄭朗は、あざなを有融という。開成年間に起居郎に抜擢された。（あるとき）文宗が宰相と政治の議論をしていた。（そのとき文宗が）たまたま鄭朗が螭頭のあたりで筆を執っているのを見て、「さきに議論したことは、もう記したのか。わたしはそれを見たい」と言った。鄭朗は言った、「わたくしが筆を執って書いたものは、記録なのです。おそれながら、故事にしたがいますと、天子は記録を見てはならないのです。昔、太宗皇帝が記録を見ようとされました。（そのとき）朱子奢は『記録は、善を隠したり悪をはばかったりしません。平均点以下のレベルの皇帝は、自分の不正を飾ったり過失をかばったりすることがあります。（こんな皇帝に）記録を見せれば、史官は（皇帝の叱責を）逃れようがありません。さらに（史官は）真実を書きとめなくなります』と。褚遂良もまた『記録は天子の言動を記すものです。不法なことであっても必ず書きとめて、天子が自分の言動を慎むように願うのです』と言っています」と。文宗皇帝は喜んで宰相に言った、「鄭朗は故事を引いて、わたしが起居注を見るのを願わない。りっぱに職務を守る者だと言えよう。となると、人君の行いは、善も悪も必ず記すわけだ。わたしは日頃の発言が政治の基本に叶わず、将来の恥となるのが気になる。どうか一回見せ

てもらえれば、自分で改めることができるだろう（だから、見せてほしい）」と。鄭朗は結局、記録を奉って見せたのであった。

解答

問1　ニ　　問2　ホ

問3　ニ　　問4　イ

解説

問1　傍線部の文の構造を見てみよう。「史官」は、主語。その下にくる「無以自免」部分の「無」は、多く名詞（あるいは名詞性の語）を否定する。では、「史官」には何が「無」いと言うのか。その下の「以自免」を見よう。「以自」は「自らを以て」と訓読できそうだが、「自」は「みずかラ・おのづかラ」と読む副詞で、もし〈自分を〉という意味に訓読するのであれば、「以己（己を以て）」という形になる。「自」は副詞だから、日本語と同じように述語（動詞・形容詞など）の前に置かれ、次にくる述語を修飾して「自ら免る」のようになる。したがって、「史官」以下の訓読は、「以て自ら免るる（こと）無し」となる。「以て」は「……を以て（＝……によって）」となるのであるが、ここでは「……」が省略されている。だから、傍線部1の意味は〈自分で逃れる手立てがない〉、あるいは〈自分で免れることができない〉となる。文末に「得以自改」という句があり、「以て自ら改むるを得ん」と訓読している。この「得」と「無」は正反対の意味を表すが、句の構造は同じだから、傍線部1の文法面からの理解に役立つ。

次に、文脈の流れから考えてみる。「免」は〈のがれる・まぬかれる〉という意味なのに、選択肢にそれはない。しかし、起居郎は皇帝の言動を善も悪も隠さずに記録するのが任務であるが、平均点以下の凡庸な皇帝だと、自分の不正を飾ったり過失をかばったりしがちだから、そんな皇帝に真実の記録を見せれば、史官は皇帝の責任追及を逃れられなくなる。ということで、ニが正解。

問2　傍線部2の下句「庶幾自戒」の「庶幾」は、二字で「こひねがフ」と訓読する（「しょきス」と読んでも間違いではない）。すべての選択肢で「願う」と訳されているのに注意しよう。そうすると訓読は「自ら戒めんことを庶幾ふ」「自戒せんことを庶幾ふ」

などのようになる。

次に、上句「雖非法必書」の部分だが、「（天子）自ら戒めんことを庶幾ふ」ために「天子の言動」をどのようなことでも「必ず書す」という文脈だと考えられるから、「非法を必ず書すと雖も」ではなく「非法と雖も必ず書す」と読むことになる。では、「非法」とはどういうことであろうか。選択肢によって理解が分かれている。イロは「法を非難すれば」、ハホヘは「不法な言動」、ニは「法に違反する（臣下）」である。ここで本文の内容を考えると、天子の言動の記録に関するものなので、「法を非難」すること、また、「臣下」とは無関係である。「非法」は「不法」と同じだから、傍線部2は〈不法な言動であっても必ず書きとめ、（皇帝が）自分の言動を戒めるよう願う〉といった意となる。したがって、ホが正解。

問3　文宗は〈鄭朗は故事を引いて、……なのは、りっぱに職務を守る者だと言えよう〉と誉めている。鄭朗が、太宗皇帝の時代の朱子奢と褚遂良の「故事」を引用したのは、史官である鄭朗の記録を文宗が「見たい」と言ったので、それを断念させようとしたためである。

文宗の言葉「……なのは」にあたるのは「不 A 朕見起居注」の句で、その主語は鄭朗である。Aの下は、「起居注」に注があることから容易に「朕起居注を見る」と訓読でき、鄭朗は文宗が「起居注」を見るのを願わないのだから、「不 A 」は〈願わない〉といった意味になるはず。そして、これに該当するのは「不」欲」しかない。以上よりニが正解で、他のどれを入れても、意味が通らなかったりズレたりする。

問4　傍線部3の前後を中心に、文脈を押さえておこう。「記録を見たい」との文宗のことばを、鄭朗は故事を盾にして断った。文宗はさらにあきらめずに傍線部3の言葉を述べ、「一目見せてもらって、自分の欠点を改められれば」と願ったので鄭朗は記録を見せた、という文脈である。

では、傍線部3で文宗は何を言ったのか。主語は「朕」、それに対応する述語は「恐る」で、それ以下は「恐」の目的句である。次に、熟語、あるいは、言葉のまとまりを見よう。「平日」は、〈日頃・ふだん〉。「治体」は、注にあるとおり〈政治の基本〉。「為将来羞」は「将来の為（ため）に羞（は）じるのも変だから、「将来の羞と為（な）る」と読むべきである。「将来」は「平日」に対して言っている。

要するに、文宗は「わたしは日頃の発言が政治の基本にかなわず、将来の羞となるのが心配だ」と述べたことになり、イが正解。